世界史の使命（中）

ドクトル　ルード井ヒ・リース原著
文學博士　坂口昂
文學士　安藤俊雄　共譯

第六節　文化活動の段階

自然を征服せうとする人間の目的意識的活動は他のこれと反對の顧慮が之に容喙して來ない限り既得經驗を出來るだけ利用して力（クラフト）の增進とその利用とを實現すべく、一樣に驀進するものであるが故に、この自然界征服の領域に於て、一個の不斷の進歩が尤も確實に認められる。されど後世に生きながらふ人々が、この現實の自然法則的進歩の過程の中で仕事を始める際に自分の出發點とする先行條件は、自己から長い時間を隔てられた祖先のそれとは全く異り得る。何んとなれば、この間に行はれた個々の點における數多の改善の結果は、昔とは全く異れる事情を造り上げて、各々の新活動の出發點となるからである。かく幾多の差異が積りにつもつて、遂に後世の全生活を本質的に變改するほど大層になつたならば、吾々は今や一個のより高い發展段階が到達されたと云ひ得る吾々はこれらの段階を概念上差別し、一つ一つ次々に續起する各段階に於て固有に傑出する標識を

取り出して、その特稱とする。吾々は今日尙ほ、未だ高い文化發展に上つたことのない民族を觀察するの機會を有するが故に、尤も高く發達した諸民族の久しい以前の過去の生活形式さへも、これを眼前に彷彿せしめ得る甚だ廣汎な且つ信賴すべき材料を有し、吾々はこれを利用して比較に供し又は更らに深い研究の探りとすることが出來る。それ故に、原始時代に於ては、漁獵が人間の必需食餌を造るの方法であつたことは容易に確信せられる。かゝる狀態に在つては、吾々の把捉するところでは、人間が孜々汲々獲物を逐ひあるかなければならぬ山や川は、尙ほ未だ價値物體として考察されず、一定の個人はこれらの物體に對して、一個の特有の、卽ち第三者を排除する利害關係、換言すれば自己の財産權を有してゐない。これが更に異つた一つのより高い生活の仕方に成るのは人間がその主要食餌をば、自分が飼ひ馴らした家

畜の肉類、乳汁に求めるやうになつてからである。何んとなれば、家畜の所有者は、家畜を扶持するために、牧場の草の繁茂を確實にし、草が喰ひ盡されたならば、他の草多い『草地（トリフト）』に彼等を追ふてゆかねばならぬ。吾々は今日の草原野（ステプペン）及び半荒蕪地に於ける實地觀察よりして、かゝる遊牧民族の生活を推知する。この樣な土地に於ける狀態は、吾々がこれまで他で知つてゐる文化狀態と比較しては、不完全であつて、まだ進步しないものと思はれる。けれども、人類の太古に於て、かの五福音書第一卷に叙述されてゐるが如く、行はれて居た民族生活は、成程如上の遊牧狀態に似たものであるが、而も全く異つた光景を呈してゐる。そこでは、家族の父、若くば種族の長老として尊敬された族長（パトリアルヘン）たちの最高頭目が、既に人間の品格及び正義の理想に隨つて、君主、判官及び祭官としての高貴なる權利を行使してゐた。遊牧生活は、無

邪氣な快樂に富み、高尚な風習や、家庭的、社交的道德の萠芽をそのうちに含んでゐる。牧畜の民は數多の家畜の惠みと、豐饒な大地の生產力との御蔭で、飢渴を醫すための不斷の憂苦もなく、よく賓客を待遇する法といふ神聖視された風習は彼等を氣高くし、歌謠と種族口碑とは彼等を美はしくする。外的財貨も乏しく、その價値及び使用の尊むべきを知らず、まだ堅苦しい身分の上下や、うはべの社會的名譽にも習はないが、他方では貪慾を喚起し、嫉妬を培ひ、虛榮をそゝる何等の排他的財產といふものもない。されど遊牧民族は唯だ人烟疎らな、自然によつて交通の遮斷された地域に於てのみ存立し得る。彼等はその漂泊のために、土地の餘裕を有しなくてはならぬ。さもなければ彼等は近隣の種族と爭鬪に陷る、かくて掠奪慾が呼び醒まされ、無事平和の氣分が復讎の感情に窒伏され、種族長老の族長的統師は變じて權力把持者の抑壓政治となるべきである。

牧畜に對して農業が漸次起つて來て、その需要が牧畜のそれに打勝つ位に盛んになると、生活の全容態が一變する。何となれば、この程度に達すると、場所の變更が耕作地附近の僅少な距離の內に限られるのであるから、よしや、いぶせき小屋が『移動する財產』として、年から年へと、野仕事の最も收穫多き處女地のある場所に移動しなくてはならぬにせよ、吾々は既にこれを一つの定住生活と云ひ得る。收穫の中から多大の貯へが取り置かれ、次の收穫があるまでの長時間を通して、一定の計畫で配分せられなければならぬ。聚落生活に秩序を與へ、器具を確實に保管し、家畜の利用をその所有主及び飼方に保留せんがためには、昔に比して、所有權のより正確なる決定と、自他に關するより確實な權利標準とが必要となる。それ故に、土地耕作は人間文化の歷程に取りて『人生(ダス・グロー

の大關門（セントール・ヌル　メンシリヒカイト）』と稱せられてゐるのも無理ではない。以前よりもより多く艱難辛苦の伴ふ現實生活に服しなければならぬことになつて、農業に從事する民族は、主として實際的財貨を培ひ作り、隨つて詩歌的口碑の形式や文學歌謠の創作などの空想生活よりも、權利關係とか、共通の幸福を促進すべきあらゆるものとかに對し、より多大なる用意と努力とを捧げる。勿論、既に農耕の卓越して行はれるまでに進歩した團體に於ても、離れ〴〵に暮してゐる漁夫、獵師、及び牧者達は、彼等の穫物や、家畜の增殖やを、一部分農業者の產物と交換して、容易すく世渡りして行ける。如上の容易すく貯藏された收穫をもつて一地點に於て人間のある多數を養ひ得るといふ可能性は、村落や都市に於ける聚落生活を促進し、こゝでは分業によつてそれ〴〵の職業に於ける高等な技能や集團全體の業績の著しい發達が實現する。手工藝人、

商人、醫師、書記、僧侶、敎師、藝術家はひたすら各自專門の特殊な職務に從事し、彼等が自ら切り開いて來た技術の進歩を、弟子達に傳へ、その職業生涯の始めに於て早くも習得せしめる。幾ばくもなく、都市文化は、不斷の新らしい〴〵目的へ到達せんとする一大努力として、『市場（マルクトフレツケン）』となつて現はれ、かの、年々歲々一樣なる形式の下に收穫の循環で結びつけられたる村落や田舍の傳統に對して、著しき異彩を放つて對照する。すると近隣の諸都市も亦た利益の競爭に這入つて有無相通じ、相互に他を促進し、刺激するから、その地方、その地域、否な、遂には種々相異れる物產の交換を以て相互に補ひ合ひするいろ〴〵の地帶より或る國土集團（ランドマツセ）が、一個の交通によつて連結された統一體を形造り、この統一體はよく河川及び海洋を利用して大いに物資の交易を促進する。航海も江灣上の『沿岸（ベラギツシユ）』交通より、それから內海上の

『海上』(メラーシフシュ)帆走となり、遂に世界の大海上の『太洋』(オケアーニシュ)航行に進み、遂にその時には、陸上の廣大な遠距離の困難も鐵道建設によつて打ち克たれ、全世界は物資の交易のために、さながら一個の大都市を形造るといつても可いやうになる。

されば、經濟生活の各段階は、他の文化發展の領域における特殊の現象形式のために好都合な先決條件を創造し、若しくばこれを除去するが故に、世人は往々一民族、並びに人類すらの發展の行く方をも、經濟上の生活條件の推移を辿つて行つて、この推移から、すべての他の變化が導き出される、といふ方法で、最も簡單に理解出來ると信じて來た。この際、自然物經濟、貨幣經濟及び信用經濟といふが如き國民經濟上概念(ナチオナール・エコノミッシュ)は、段階推移を表はすに、更らに大なる補助手段と見られてゐる。絶えず臆測と一般化とを推しひろめて行つて若干の歴史家は次の假定に到達する、それは卽ち到達せらるる各段階の經濟生活の完成を基礎として如何なる團體における精神力の活動も亦たそれによつて進歩すること、而して一個の全體生活の各發展段階ごとに、その團體に屬する個人の『精神』(ゲシケ)もこれに相當して、少くとも大體に於て豫想され得るといふことである。いかなる諸民族にあつても、その文化の根本基礎となる改善進歩のために、或る程度の努力の一樣性を豫想し得るが故に、これらの發展期(エントウイケルングスファーゼン)なるものを作り出して、どの民族の歴史的進歩でも、すべてを一定の型(シエマ)にあてはめて決定し得ると信ぜられてゐる。かゝる考察法は、個々の行爲、人間、事件を叙述せずして、民族經濟上進みゆくと豫定された段階の最も特色ある現象の形式を指摘して滿足し得、そしてこれらの『狀態』(ツーステンデ)の轉化に於て、歴史的現實の特殊な生活要素を把捉し得ると思ふてゐる。

さりながら、かくの如くに、歴史の思ひ出の古

來行はれてきた傳承の仕方から脱線するのは、いかなる歴史叙述にあつても、とりわけて第一の問題となる尤も重大なるものを成し遂げる所以でない、即ち、個人及ひ團體生活に於て現實に働いてる諸ろの力（クレフテン）に對して一個の同感と一個の觀照とを吾々に創造提供することは、それでは出來ない。そも〳〵これらの力たるや、相互の間でも又た自然的事變とも、絶えず新らしい葛藤に錯湊して以て偉大なる文化發展を持ち來たし、自我を主張し、相互に競ひ、再び消え失せ、かくこれらの變轉無常のために、遂には只だ追憶の影像を殘すばかりになるものである。吾々に容易すく認識されるところでも亦た、吾々の時代の最も進歩したる民族にあつてすら、彼等の通過した以前の發展段階の型が、今も尚ほ現代生活の荒波のたゞ中に名殘を留めてゐる。その上に、吾々は、より高く開化した民族が、その遠近の尚ほ後れた種族に及ぼした影響によつて、彼等の文化財が何等豫め準備する所もなしに傳播しゆき、隨つて、かの確立されたる型（シエマ）で豫想されてゐる是非通過すべき必然な中間階級をも飛び越してゆくことをも知る。然り日本人の如き孤立した島國民族は、未だ曾て遊牧生活を知らないで、漁獵民族の狀態から直ちに農業民のそれへと移りゆき、旅客輸送のためにマカダム式道路や馬車をもまだ有しないうちに、一足飛びに、鐵道を採用したではないか。

それ故に吾々は經濟史家の概念影像を、直觀獲得の便法として場合によつては用ひてもよかろうが、彼等から提供された縮約の方法を以て、すべての人類の進みゆく過程を滿足に把捉すると信じてはよろしくない。

これと同樣に文化活動の何等かの或る他の方面を以て、史的利害關係を徹頭徹尾限定する尺度となすことも不可能である。若し歴史本來の作業領

域は政治的出來事であるとか、若しくば歴史は憲法史に外ならぬとか主張されるならば、この際には、いかなる史的思ひ出の大なる復合體の中にも國家相互の關係若しくば國體の作り上げといふ事件が、舞臺の背後に退いて、他の人間的利害關係に場所をゆづる時期（ペリオデン）のあることが看過されてゐる。いかなる歴史同好者の評價に於ても、アレクザンドル大王の後繼者（ディアドーヘン・ツァイト）時代の政治上紛亂は、『ヘレニズム』文化の急激廣大な發展のために光を失ふてしまふ、何ぜなら、當時希臘の言語及びその教化は東方民族に傳はり、その精神は彼等を貫通衝動し、かくて近隣の民族等から蒐集された經驗材料にすら深く沈潛して、文化の内容が豐富にされたからである。アレクザンドリア學林（ムセウム）の造詣深き著作、ストア及びエピクリア學派の哲學上文献、希臘化した古代東方世界に於ける基督教の進歩は吾々にとつて同時代の政治的、國法的變動よりも更らに重大である。吾々の眼を精神的に開いて視れば、中世といふ大いなる時代は、羅馬の保護職（パトリチアト）がオドアケルへの移轉、或ひはメロヴィング家の下に於けるフランク國の強大を以てすらも始つたのではなくて、古代文化の急激な衰亡と西歐一圓に對する野蠻人の侵入とを以て始ると思はれる。すべての教養ある人士は『陸地發見時代』の重要な事件を能く熟知してゐるが、而も、同時代の皇帝マキシミリアンの時代の獨逸國に於ける制度改革（フェルファッスングス・レフォルメン）については殆んど朦朧たる表象を有するに過ぎない。吾々は教會改革（レフォルマチオン）及びその反動改革（ゲーゲン・レフォルマチオン）の時代といふものを設け、それで十六世紀の宗教上爭亂及びその決定が、實は既にその以前から造られて來た政治上國家組織の繼續發展よりも、より重要であると、全然明瞭に言ひ現はすことが出來る。故に、幾多の諸民族に亘れる一個の史的連繫を把捉する場合、種々相異れる時期（ペリオデ）に於て輕重の決定

を與へ、かくて吾人の回顧的考察の眼を特に惹きつけるのは、種々雜多なる利害關係の複合體であることは明らかである。所詮、世界史的事件及び現象は、人間生命の血脈が搏つて居る限りのすべての領域にわたつて起伏し得る。

第七節　史學と社會學

歷史の全過程のために、その中で實現される筈であるといふ一定の主要目的を探求せんとするあらゆる今日までの企圖が、人生を知れるすべての人々の悉く一致せる確信に隨つて、すべて誤れるものとされるならば、こゝに次の疑問が起る、曰く、かくの如き企圖がいつかは達成せられるといふ可能性を、吾々は頭から否定しなくてはならぬかと。あらゆる經驗ある歷史研究者たちに、すべて如上の企圖の絕望なることを確信せしむるものは、次の二個の根本理由である。第一には、

人間目的の世界（インシリンヒ・ツエエック）には、若しさうであるとすれば、その際必ず豫想されなくてはならぬ一個の系統的統一が、實際は缺けてゐるから、第二には、吾々は自己に周知の時代に對して、その時代〳〵の中で活動する人間には、一個の本質の平等（ウエーゼンスグライヒハイト）がひろく行き亘つて認められる、それであるから肉體的及び精神的關係に於て吾々の種族の平均典型が層一層完成されてゆくといふ理論は到底信じ得られないから。

吾々は、最初に、後の主張が如何に重大な意義を有するかを明らかにせう。時代の經過に於て增加するものは、材料と使ひうる道具の分量とであつて、新味を創造し變化を導き出すべき偉人の優秀なる力ではない。近世に於ける最も天才的將帥とても、現今戰術の使用しうる限りのあらゆる方法をつくしても、二千年より以前の、かのカンヲーの戰に於けるハンニバルより以上の大事業を成

就することが出來ぬ。ホメロスの歌謠や、ヘブライの詩篇に於いて、ソフオクレスや、沙翁の劇に於いてウォルター・フォン・フォーゲルワイデの詩や、ゲーテの詩に於いて存するよりも、それ以上の高い業績を、一個の現代詩人に期待するのは無理だ。アレクサンドル大王やシーザルは、後世何人からも凌駕され難い世界史的大影響をもたらし而してプラトーやアリストテレスは思索力に於いて、カントやヘーゲルの下風に立つものでない。轉じて、若し吾々が種々異れる時代〳〵に於ける民族の集團を相互に比較するならば、彼等の間の能力や衝動の一致は個人の間よりも尙ほ遙かに大いなるものがある。農夫はすべての時代に種々異れる地方に於て大體同樣であつた。アヒレスの天幕の前に、パトロクルスの屍體が到着した際、自分達の見たい見たいの好奇心を滿足さした女達について『彼女達はパトロクルスのために泣いたといふが、眞實は各自自身の悲しみのために泣いたのだよ』と、ホメロスが歌つたところのものは、尙ほ同樣に、他の民族の場合に、多くの葬式の際行列をつくる婦人達について言はれても、等しく肯綮に當つてゐる。若し人間性質のこの類似性(グラヒアルデイヒカイト)が、すべての時代及び國々に存立しなかつたならば、過去の幾世紀及び外國の事情に對する理解は有り得なからう。何となれば、內面的洞察の主要槓杆は尙ほ常に、現在における自己の體驗と觀察とを以て類推するにあるからである。吾々の親友に對してすらも、吾々は必然上、『我は汝をしかく理解するが故、汝は然らざるべからず』と斷定しなければならない。されば、若し吾人が、幼稚な發展階段に在る一民族につきて、當時の人心の考方には唯だ個々無差別な『類型主義(テイピスムス)』のみが可能であつてその他は有し得ない、その民族の表象界が次第に『集合主義(コレクティヴィスムス)』の階段に高まり、最後には『個體(インディヴィヂッエン)』

の獨立まで發展するのは、それからであると、信じ得るとするならば、吾々はかくの如くこまかくわかれてゆく分化に於て、歴史的發展の意義とその本質的内容とを認知し得ること、尚ほ更ら容易であるまい。

次に、目的界に於ても、一個の系統が明らかに存在するものでもない。強く倫理的傾向を力説する哲學者連の『至上善』なるものは、一民族又は一世代の人間的行動の最後目的として未だ曾て認められたことはない。吾々は人間の全體生活に對して、いかなる最高理想をも、標準的のものとして取り上げることが出來ない。人生の現實に於ては、『爾等は地上に於て一民族及び一群となるべし』てふ古代より傳來せる思想も、永久平和の希望も、或は普遍的平等てふ理想鄕的主義も、いづれも主導思想たるに妥當しない。否な凡そ自由に對して目醒めた人間性の自存獨立なるものは、全人類の目的意識のために何か或る人生の行路を導きゆく星辰が輝いて居るといふ事が永續的に妥當するを、到底忍ぶことは出來ない。何となれば果してさうであつたなら、吾々の精神活動の自由を窘めて怵へきれなくせうとするのであつて、人類に對して尚ほ許容されたる未來も、これがために眞暗闇にされるからである。

されば、世界史的事件の全體を一つの物で同じ形に次々と並べたてる便となるべき何等かの物としての路筋は存在しない。史學の内容は多種多樣である、それ故に史學は、例へば、法學或は國民經濟學の如き、他の精神科學が既に有するやうないくらか完全さを以て寄せ集め得られる百科全書風の概觀をば、必然的に缺いてゐる。最近に至り一の特殊研究、卽ち社會學によつてこの缺陷を切り拔けやうと試みられてゐる。これは、歴史生活に於ては、心理上の力を基礎として共働する人

民集團の間に相互作用が、最も多く問題となるものである、といふ前提から出發した。この學派の信ずる所によれば、是等の力のいづれに取つてもいはゞ一種の叙述的解剖學が抽象せられ得、且つかくの如くして、人間の性質から社會史的世界の現象を説明し得る一個の經驗的社會倫理學が現出されるといふのである。共同生活の形式に於て著しく現はれてゐる人間的衝動を分解すれば、個人心理學と相並んで、苟も人間の社會構成によつて始めて實際にあらはれくる力（クレフテン）の解剖も、亦た提供せられべき筈である。人間の多數に共通するすべての動作は、かゝる方法で發見さるべき社會的衝動に、その根底を有しなければならぬ、といふ前提から出發して、歴史的出來事の必然性が指摘され得ると信ぜられてゐる。といふのは、この歴史的出來事を、社會學的法則の特殊なる場合として叙述すべきことになつてゐるのである。今日に至るまで、この社會學てふ新しい學問は、尚ほ未だ、それ自身の本質とその特殊目的とについて何等の諒解に到達してゐない。されど吾人は恐らくば、社會學の特殊原理として次のことは確立し得やう。即ち、社會學は、心理的機械的秩序（メハニスムス）を一層精確に觀察せうと欲すること、この機械的秩序の手段で、人間の或る多數が有する一個の確定した目的意義と、彼等の間に行はれてゐる一個の意志活動とに關する知識が報道されて社會學に移され、その結果、群集心理の現象が成立つやうにすること、是れである。今日に至るまでこの領域では尚ほ未だ新發見がなされてゐない。性慾、職業上嫉妬心、血緣、及び弱者の勞苦の結果による强者の奢侈生活、これらのものが第一次的群集本能として社會學者に注意されるやうになつたといふことは、彼等社會學者達の功績ではなくて、既に最古の時代に於て初歩の生活經驗として思索家や詩

人達によく注意された觀察である。之れと同じく各自共通の本能に依て運動を起した諸ろの集團は相互に團結し得、而もまた時代から時代へと始終各自の生死を賭しての爭鬪の葛籐に陷るといふ事を發見するには、何等社會學を必要としない。若し人が、如上の結果として生ずる遠心的及び求心的現象を、ハーバート・スペンサーに據つて、同種(ホモゲーネン)から異種(ヘトロゲーネン)への分化(ディフエレンチールング)として、また、かくの如く異種に成つた物から、更に一個の新らしい間もなく再び分化に陷らんとする統一物への集成(インテグラチオン)として、それ〴〵言ひ現はすならば、これは唯だ如上の右の經驗を自然科學の言葉に言ひ改へたにすぎない。かゝる換骨奪胎したばかりの技巧的表現(クンストアウスドルックケン)の發明だけでは、社會學的機械觀は、吾々の歷史的諸變化の理解を從來よりも進めることは出來ない。若し社會學が、歷史的過程のために『攪亂に比例して關係が累進的に增加するといふ法則』を見出さなければならぬと信じ、この法則の內に『開化(チヴイリザチヨン)』の本質ありとするならば、これ亦た吾々に利するところ多くはないのである。以上、社會學の提供する一切のものは、久しく歷史家の間に行はれ、日常生活の言語に於て、社會學者よりもより多く確定的に言ひ現はされてゐる。何んとなれば、すべての現實を模寫する歷史叙述の吾々に示すところによつて、吾々は、一個の團體に於て相互に結合されてゐる個人たちの間に、如何に對抗的努力が現はれ、その努力の標準に從つて諸黨派が形造られ、これら諸黨派が、種々異なる各自の特殊目的に相當する實行方法で、その團體に影響を及ぼさんと努力することを知り、而してかくあつてこそ、その團體の諸事件は、すべての關係者から熱心なる興味を惹き、層一層大いなる犧牲を拂つて促進されることを知るからである。實に、歷史は、近代社會學の今迄に把捉せる

概念よりも、遙かにより錯雜した諸概念を、世上大方に行はるゝ把捉の用に供し、その勝手に使ひ得るやうにしてゐるのである。すべての成熟せる人々は、自己の生活經驗から、どのやうな現象複合が一個の歴史上『危機』に於て期待さるべきか、而して如何にこの現象複合の内から、『妥協』によつて一個の新なる「活路(モーヅス・ウイウエンディ)」が開かれ、更にこのものにつきて新らしい爭が始められるかを知る吾々は社會學的演繹からよりも、遙に速かに、たゞの初等歴史叙述の内容から、次の事實を知る。卽ちいかなる歴史的群像に於ても、隨時に『改革(レフオルメン)』が新變化として必然的に起り、『革命(レヴオルチオネン)』が迫り來り、『復舊(レスタウラチオネン)』が企てられ得て『反動(レアクチオネン)』が避け難くなる。『一クレーズス』、『一宗教政治(ヒエラルヒ)』、『一バナマ』、『一イェーナ』(ein Krösus, eine Hierarchie, ein Panama, ein Jena) 等の如き唯だ歴史事實で暗示されたばかりの諸關係は、却て充分な確實性を以て一般の意識の中に這入つて、何等の說明なしに直ちに概念影像として利用され得る。吾々の觀察する歴史的運動は、吾々に知られない法則に隨て時代から時代へと昂まりゆき、一般生活の全體範圍を刺激するに至る。吾々はこれらの運動の因果連絡を把捉し得るが故に、吾々はかの概念構成によつて人間の衝動生活に一樣なる一個の要素を抽象し、以てこの生活の本質(ウエーゼンスグルンド)の根底までつきとめんとする社會學の努力に依るよりも、歴史によつて更により確實に、人類をそのありのまゝに理解し得るに至るべきである。

第八節　最も卓越せる世界史の叙述

いかなる歴史的叙述も、その讀者たちが、自分の現在に存立せる事情についての或る程度の知識と、言語の寶庫に於て一般財産となつてゐる限りの生活樣式についての、一般的教養程度に相應し

たる理解とをば、それ〴〵有つてゐることを豫定しなくてはならぬ。凡そ歴史叙述は、若し人間の目的意識的行動のため、本質的な、而も不規則に反覆する諸變化を蒙つた一個の利害關係の複合體をば、その直觀の下に置き、以てその際に過ぎゆく種々の側面を一纒めに把捉的に考察に入れるやうにしたならば、その任務を全うしたのである。この歴史叙述は、一個の廣くゆき亙る人間素質としての、同時代人の歴史感（ヒストリツシエン・ジン）に關連さして、歴史同好者をして、出來事が、恰ど歴史の叙述せるが如くに、本當に演了せられ、特に因果の連絡が當該叙述の證明せうと努めて居る通りに、事實上連絡してゐた、と確信せしめやうと試みる。この際、吾々の使用し得る有らゆる記述の方法によりて、決定的重大事實を、正だしく確立するためには、如何なる煩勞をも厭はれてはならぬことは、自明である。然れども、かくして獲得された事實

の模寫が、その作用とその價値とに從つて、それが現象となつてあらはれる環境總體の中へ、適當に嵌め込まれるといふことも、また之に必要である。歴史家は、苟も自分が活々とした内容の秘密を發きて之を吾々に闡明せんと欲するところの各過去の中へ、一々、あらん限りの力を擧げて深く沈潛しなければならぬ。されど、尙ほ第三としてこの上に加へられなければならない必要條件が一つ殘つてゐる。それは各歴史的に究明された對象のために、數多の歴史的思ひ出の總體影像の中に於て、その對象が如何なる位地と意義とを有するかゞ決定されなくてはならぬことである。但し、歴史的思ひ出とは、卽ち現在の世代に尙ほ活々と殘つてゐるか、さもなければ、之に對する研究によつて、新らしい、疑ふべからざる結果として、確立され得たものか、いづれでも可しい。

かくの如き方法の下に科學的に研究され、明瞭

な叙述に於て確かな所得として保持さるべき、測り知り難いほど多數なる對象の間に、益々專門化せんとする分業が生ずるのは、止む得をない。ギボン、ニーブール、モムゼンのやうに羅馬人といふが如き、唯だ一つの單個な民族の歴史のみに深くたち入つて從事した世界的名聲の歴史著者がある。他の或るものは、自己本來の研究範圍を年代上に限つてゐる、卽ちワイツの中世期に、ヅォルテールのルイ十四世時代に、ゲルヴィヌスの十九世紀に、ブルクハルトの文藝復興期に於けるが如きこれである。これと同樣に、人間活動の特殊方面、若しくはその人間活動の內部にある個性的現象についての歴史的概觀がある。吾々は唯だ例としてデルブリュックの『政治史の輪廓に於ける戰術史』、サヴィーニの著名なる羅馬法の後世に存續する歴史、レッキイの啓蒙思想の歴史をあげておく。これらの首尾一貫せる把捉にあつても不規則に反覆する諸變化の因果連絡を指摘して、對象物の意義と重大さを新光明の中に置かんとする努力が流行してゐる。されば、本來の意味に於ける歴史著作があり、その旁らに、これと相並んで、たしかに形式上歴史である研究もある。このものは、例へば文學史或は美術史の如くに、物の上に於て最も緣の近い文化獲得物の年代順に蒐集蓄積するいはゞ一個の貯溜池、一個の穴藏の用に供せうとするのである。されども年代の筋道が、十年、世紀或は人間の世代に隨ふが如き、單に外面的なものに止まるべきでない場合にあつてすら尙ほ且つ過去生活の一般的時代區分が早く既に確立され、苟も敎養ある何人にも明白に通用するやうになつてゐなくてはならぬ。それ故に、歴史感の眼醒めと共に、同時に、歴史的思ひ出の財寶全體を一個の統一的に把捉されたる諸の出來事の系列へ關係さそうとの慾求が起る、この系列こそ、

『一般史』として一個の人類意識中に保持される表象となつてゐるものなれ。

以上の理由により、世界史の概念は、羅馬の征服完成後、人類が自己の統一性を意識するやうになり始めたときに、何等のいきさつもなく早くも世人に與へられた。當時現はれたディオドルス・シクルスの大著作『歴史叢書』は、最古代よりシーザルのガリア戰役に至る四〇卷より成り、惜むらくば今は唯だ斷片しか存せないが、すべての世界史的叙述の劈頭第一の位してゐる。基督教は、全き古代文化を自己の内に攝取し始めたとき、自らもこの世界史の内容に對し正だしき態度をとり、その中に含まれたる全體觀念を自分に正當に採用しなければならなかつた。當時、希臘羅馬の文化圏が作つた歴史的勞作の全收獲を、猶太民族の歴史的傳統の中に攝取することが成功するや否やは、世界的宗教としての基督教の將來にとつて極めて重要な意義を有してゐた。恰も善し、聖書のうちの歴史物語には、既に宗教上關心から、すべての知られたる諸民族が、彼等の最初に於ては相互に血縁ありとして、一個の共通祖先へ溯らせてゐたのであるから、是等の諸篇に於て、如上の目的のために一個の適當な連絡と一の世界に廣がれる輪廓とが見出された。教會の師父達にとつて重要なる神の救ひの歴史、若しくば教會史に對して、あらゆる政治的な、異教徒をも包む出來事の統一は、一個の對立影像であらねばならなかつた茲に『世界史』てふ名稱は、本來は、俗世間の出來事の歴史として、實に『教會史』と對立する『不淨史』として、一般的歴史の叙述のために擡頭してきたのである。

すると直ぐ、これに最もよく相當する時代區分も試みられた。既に紀元後第二世紀に於てリヨンの監督イレネーウスが、天地創造の六日に相應し

て六個の世界時代の型を提出した。テルツウリアンは、幼年から青年、壯年への發達の影像を、世界の人類生活に對しても認めて、之を思想界の前面に押し出した。ヒエロニムスはダニエル書にある四個の世界的統一國に後返りして之を摑まへた。アウグスチンは、すべて如上の三個の表象を取り混せた。セヴィルラの監督イシドールによる六個の世界時期に從ふ時代區分の革新は、大洪水、アブラハム、ダヴィッド、バビロニア幽囚及び基督誕生の各時點（エポーク）、卽ち敎會史上著しい諸の出來事を、浮世の事件の變遷を考察する中へ入れたのである。イングランドの學僧ベーダはこれらを採用したが、彼の敎會史には尙ほモーゼ紀をその間に挾んだので、基督誕生は第六時代の終末に來た。それ故にその後では世人は、かの世界統一國の興亡の順序による世界時代の算定を可なりとし、その最後なる羅馬帝國が少くともコンスタンチノープルに於て尙ほ存續しつゝあり、又た、西歐にはカール大帝に於て復興されたといふことに、大いなる價値を附與することになつた。併し、一四五三年トルコ人によるコンスタンチノープルの陷落によつて、かの世界史のために採用された四個の世界統一國の理論は動搖するに至つた。

十八世紀以來、古代史、中世史、近世史の三大時代に分つ簡單なる區分法が採用せられたことはゲッチンゲン大學のツェラリウスの世界史敎本の影響に負ふのである。ツェラリウスは、公正な感情を以て西歐に於ける古代文化の沒落を、過ぎ去つた世界史の一大段落と認めて之を現はした。併し彼がこの段落を、既にコンスタンチン大帝の時代に置いたのは早きに失して居る。後には、かの蠻夷オドアーケルへの羅馬守護職（パトリチアート）の移轉で西羅馬皇帝權が終末となつたから、この四七六年が採用されることになつた。但し、アルフレッド・フォン

グートシュミドが當時蠻夷が實際に西方に於てその運命を決定する勝利を獲得したのは、本來は五六八年であつて、東羅馬帝國が新波斯との鬪爭によつて一變せる世界的地位に墜ち入つたのも亦た之と同時であるが故に、この五六八年が一個の顯著なる段落を意味すると結論してゐるのは、尤も肯綮を得てゐる。けれども、如上の四七六年を以てする古代と中世との限界は、それ以來採用されて來た。併し吾々の歷史的思ひ出にとつて最初唯だ公式上よろしいと考へられたこの四七六年てふ把扼點（ハルテンクト）には、尙ほそれでも頗る用ゆべき所以のものがあつた。それはこの時頃にメロヴィング家のフランク國が强大となつたが故に、このものによつて、大陸のすべてのゲルマニ諸國の統一が餘儀なくされ得たのと、これと同時に、大ブリタニアに於てアングロサキソンの要素が優勢となつたからである。それでこの年を以て、西歐羅巴に於ける優越せる力として羅馬國粹風（レーメルツーム）からゲルマニ風への轉回が、適切に言ひあらはされた。これに反しコンスタンチノープル陷落事件は、歷史上の兩時代の境界として維持されることが出來ない、何んとなれば、この事件は、諸ろの重大なる事變の進行中に於て、長く後世まで充分の注目を繫ぎ得ないからである。その代りに、コロンブスの亞米利加發見が選擇されたのは、西歐諸國民が他の一切諸國民の上に優越せることが、その內に最も明白に證徵されてゐるからである。その後三世紀經つて、佛蘭西革命及びこれと關連したナポレオン時代が現はれて一個の感知し得らるゝ段落となつたが故に、吾々はそれ以後を以て世界史の最近主要期が始づたとする。それ故に現今の世界史把捉は唯だ四個の世界時期（ウエルトツアイトアルター）（古代史、中古史、近古史最近世史）の區分で全く善く構成されてゐる。

完全な世界史は、中世及び十八世紀に至るまで

の近世に於いては僅かに教本（レールブフ）といふ縮約された把捉の内に書かれたにすぎない。一七三〇年頃に至つて始めて、一樣に書かれ且つ學者達を滿足させる完全さを以て、人類歴史的生活の叙述をつくりこれを以て世界文献に感ぜられる缺陷を補足せんがために、イングランドに於て數多の學者連が團結した。特にトビアス・スモレットの主宰するこの大著述の第二版は、大陸に於ても亦た大喝采を博した。これと競爭して現はれたのは、實はこれを基礎としてゐて而も尙ほより精細な、獨逸でシュレーツェルの主宰の下に出た世界史であつた。されど十八世紀の末つ方、佛蘭西から世界的關係の激烈な動亂が搖れ出したから、この種のすべての世界各部に亙る叙述を繼續することが中斷された。當時ナポレオンの征服事業の驚くべき進展は次のやうな意見を生ぜしめた、曰く今後世界の出來事は、曾て世界的國家大發展時代の羅馬の歴史に於けると同樣に、佛蘭西の歴史の中に收められるのであらうと。このナポレオンが征服されてから、始めて再び世界史の新企圖が出現した。今や獨逸は殆んど唯一の科學的世界史の製造場となつた。ロテックは一八一二年——一八二七年の間に於て九卷より成る『歴史知識の始より吾々の時代に至る迄の一般史（アルゲマイネグシヒテ）』を編纂した。一八四一年、フリドリッヒ・クリストフ・シュロッセルはその『相關連せる叙說に於ける世界史』を完成した、このものは九卷より成り十六世紀までを記し、二十年後に、通俗的改訂により廣く世に行はれた。ベッケルの『兒童及びその師のための世界史』は、まだ成熟しない幼ない人生經驗に歩み寄つたのである。それから一八五七年にゲオルグ・ウェーベルの大世界史の第一卷が明るみに現はれた。尙ほ彼はその第二版十六卷を一八八二年——一八八九年の間に殆んど完成した。一九〇八年倫敦に於て出版さ

れた「歴史家の世界史」は彼に賛辭を浴せかけて曰く、『彼の著作は確かも從來一人一個の筆より流出せる世界史中、最に完全にして最も包括的なる叙述であるが故に、彼は當然近世のディオドールスと呼ばれるべきなり』と。尚ほ、このウェーベルの完成しないうちに、レオポールド・フォン・ランケの人間の生活經驗と彼の殆んど七十年間の研究との最も高き望楼から觀た偉大なる『世界史』が現はれ始めた、このものは彼の存命中僅かに六卷まで出來たのみで、その後の補足があるにしても、尚ほ斷片（フラグメント）として殘存してゐる。吾々はこの世界史に於て、獨逸の歴史著作の最高業績（ライストンング）を認めるならば、尚ほその上に附言しなくてはならぬ一事がある、曰く、この世界史を理解するには、その言葉が質朴であるにもかゝはらず、深遠な研學が必要である、而してその對象についての一個の專門的知識が豫め前提とされなければならぬ。

十八世紀のイングランドに於けるが如く、獨逸に於ても一八七〇年以來、個々の民族、或は年代上の部分的時期の歴史作成を、それ〴〵一人の特にその準備ある歴史研究家の分擔に任かし、かくの如き單行著作（モノグラフィ）を寄せ集めて一人の監輯する出版著者、もしくはまた出版書肆の名の下に發表され以て一個の世界史を統一的名目の下に確立せんと試みられてゐる。ウィルヘルム・オンケンの『個別的叙述體一般史』、ヘルモールトの『世界史』九卷、ウルシタインの『世界史』六卷があらはれたのは、これである。これらは吾々時代があり〳〵とした直觀を慾求してゐるから、之に應ぜんがため、すべて挿繪や地圖を供へてゐる。併し素材を統一的觀點から洞察し、一個の全く對象中に沈潛したる精神反射の内に反映せしめるといふロテック、シュロッセル、ウェーベル、ランケの包括的の世界史叙述の長所を、これらの世界史は頗ち持ち得な

い。これらは全體として、苟も一個の深刻なる歴史感が要求する所のものに、十分の滿足を與へることが出來ない。

第九節　先史と歴史との限界

人間及びその祖先が親しく體驗した諸變化についての彼等の思ひ出は、文字が發明され、これで既往の事象に關する連絡ある物語や報道を書き止めて、之を變らないやうに傳へる方法が出來てから始めて信頼すべき形式に於て保存され得るやうになつた。記念物上の金石文や若しくば文獻上作業によつて吾々に知られてゐない悠久なる時の過去を、吾々は名附けて先史時代といふ、何となれば、このものに對しては吾々の隨意に使ひ得る歴史研究の最も重要な材料が存在してゐないからである。恐らく吾々は遠く隔つた時代からのでも、その遺物の上に殘つた人手の跡型から、當時棲息した人間の明白な有意識的行動を讀破し得る。洞穴や、水中や、地下の個々の場所に、さまざまに累積せるこれら先史時代の人間活動の痕跡が、保存されて殘つてゐるから、吾々はまた先史時代の人間の生活の仕振りや文化狀態について、身體上特質について、及び自然の環境について可成り纒つた影像を形作り得る。吾々の博物館に於ては次第に、可成り多數の發掘品が蒐集されて、人類學、土俗學上研究に材料を提供し、これらの材料は、研究上考察道程の綱目中疑なきものとして入列せしめられる。これら科學もまた、時代區分の技巧（クンストグリフ）を自らに利用し、技術上標識に從つて、人間の手が作り出した物（「技術の作品（アルテファクテン）」）に、古い、新しいの差別をつける。これらの科學の仕事は、歴史研究のそれよりも、年代上、遙かに廣い領域に擴がつてゐる。何となれば、地質學的堆積層の助を假りて、人間の手による最も原始的な加工の痕

迹ある燧石（フォイエルスタイン）器（グレーテ）が既に十萬年以上も以前の昔の時代に於て、現今それらが發見されたその場所で、使用されたに相違ないといふことが、確定され得る。ところが吾々に理解されてゐる記念物上の金石文は、精々七千年を溯り得るに過ぎないからである。それ故に、本來の歷史的研究手段を以てしては、人類原始時代史の叙述の範圍である最初の九萬三千年を越えては、如何なるたしかなことも確立され得ない。

歷史時代と先史時代との間のこの限界は、最近五十年間に於て始めて達成せられた。この間、吾々は、地球上數多の部分、時にメソポタミア、エジプト、希臘、小亞細亞に於ける發掘の驚くべき結果に負ふところあつて、以前には、そこに讀み得る文字上遺物が缺如してゐたがために、先史時代に保留されねばならなかつたところの二千年以上の時間の內から、新に歷史研究に取りて理解さるべき材料が提供されたのである。されど、これを以て先史時代と本來の歷史との間に橋梁が架せられたのではない。先史時代に對しては、吾々は技術進歩の或る階段に隨つて、既に發見された物品を分類する以上に出ることは出來ない。之に反して歷史上物語は只だ、事件が一回以上とは繰り返へされないところの諸變化をば、吾々に理解さるべき諸の目的（ツヴェックヴァムメン）連絡（ヘンケン）から證示し、滿足の出來る正確さを以て再寫することの出來る場合に於てのみ、吾々に滿足を與へ得る。

幾萬年を以て算へられたり、若しくば一體どんな間隔距離で、種々なる發見物の集團（グルッペ）の代表せる幾多の文化層が、次々に並びつゞくかが、擧げらるゝことを要しなかつたりする、茫漠たる先史時代の研究は、年代上記事が附與されなくとも進出することが出來る。併し歷史には、一個の成立せる紀年が豫定せられなければならぬ、それでこそ

始めて、人間の思ひ出をして、一定の時點（ツァイトモメンテ）に結びつくことを可能ならしめるなれ。歴史はそれが與へ得るすべてのデートを、同一の年數算定の系統、卽ち一個の紀元（エーラ）に溯らなければならぬ、例へば紀年が現今吾々の間では所謂基督誕生の年から、その前又はその後へと、行はれてゐるが如きこれである。古羅馬人は、吾々の紀年によると、基督誕生前七五四——三年にあたるといはれる羅馬府創立の年數に從ふ計算法を有してゐた。されど古エジプト人は、更らにそれよりも遙かの昔に遠く溯る紀年法を有した。現今一般に認められたところによれば、エジプト人が年代上の計算の基とする時點（ツァイトプンクト）は、基督誕生前四二四一年の七月十九日であつて、恰ゞメンフィスに於て狼星の出現が夏の開始と一致した時である。彼等はその諸國の王の列表に於て、尙ほ更一層それよりも古い時代に溯る飛び〳〵の諸デートをすら有してゐるそれ故に吾々は歴史的時代としては、今日まで約最後の七千年間を要求し得るのである。

第十節　世界史考察に關係ある先史時代研究の最重要なる結果

シュメーリング博士が、一八三二年頃にルュッティッヒ（リエージ）の傍なる四十の洞穴に於て唯だ、人間の細工風に形作せられた人手で使ふ道具として、考察され得る燧石や、破片を發見して以來、到るところ、かゝる種々の發見物を注意するやうになつた。これから原始歴史研究なる學問一部門が起り、これをその道の優れたる代表者モリッツ・ヘルチスが『先史時代考古學（プレヒストーリッシェアルケオロギー）』と呼んだ。このものは、早く地質上人類學（ゲオローギッシェアントロポロギー）と提携して進むだ、何となれば後者は古生層中にある人間の骨格、頭蓋骨の遺物を研究し、特にその發見は、現今は既に絶滅せる動物種族の骸骨と關連して殘つて居る人

間の遺物をも示し、この考古學といふ學問の進歩を促したからである。先史時代に於て人間が長らく住居として用ひてゐた洞窟や、人間が彼等の今は消え失せてゐる住所の傍に數多堆積し殘したる庖厨廢物や先史時代洞窟中に發見せられる馴鹿の角又は骨製の器具に往々見られる自然に象つた符徴、すべてこれらのものは、人間の鳥獸に優越せる所以なる文化の始めが、古の聖書信仰の基督教徒の所謂世界創造てふ時點よりも、尙ほ幾千年前に溯るといふことを證明して疑の餘地なからしめる。

疑もなく人間團體は、既に沖積紀の初め、卽ち少くとも一萬五千年前に地球上に存在した。されど、人骨が之と同樣に指示されてゐるその前の地質期たる洪積紀に對しても、その存續の長さについて吾々の下す評價は、人々によつて區々であつて、その間に甚しいひらきがある。多くの地

質學者はこの存續期を十三萬九千年に限つてゐるが、一方には他の者はこれを百萬太陽年以上に延してゐるものもある。少數の先史考古學者は最古の技術の作品を洪積紀の始めよりも前、卽ち第三紀にさへも溯るのである。特に白耳義人の研究家リユトーは、最古の人間的手型の痕跡を受けた石塊、卽ち所謂舊石器（茜色石）を、最新第三紀、鮮新世及び中新世を經て、漸新世にまで溯らうとし、かくして人類の年齡を三百萬年と計算した。併し大概の地質學者は、諸動物より優れた人類の生存を、吾々の時代以前、多くとも四十萬年よりも以上には溯らうと欲しない。

既に古代に於ける人々には、すべての人間的開化の根本萠芽が、言語の使用及び火の利用にあることが認められた。これらの太古の文化收穫について、何等の歷史的報告の道がないから、これらを說明する目的のために物語（神話）が發明された。

人間が名付けた樣に鳥獸が呼ばれ、バーベル塔建設後始めて數多の言語が世にあらはれた、といふ素朴な聖書創世紀の傳說、天界から火を盜んで之を人間に齎らし、以て彼等を神に似るやうにしたといふプロメテウスについての希臘の傳說、竈の神に仕ふる乙女（ウエスタリンテン）が、神の爐火を永劫に燃やしつゞけるといふ羅馬人の神聖なる習慣、これ皆自己の文化を根底としたる人間の早い自己意識（セルブストベジンヌンング）の象徵である。近世の先史時代研究は頗進んで來たけれども、如上の、人間が自分らが他の動物より優れたる存在の先決條件を持續的に作り出してゐた、遠い過去の時代以上には、尙ほ未だ溯り達してゐない。

歷史考察の技巧、卽ち時代區分を、先史時代發見物の整理及び評價に適用するには、唯だ細心比較の際、諸事物の間に確立し得る差別を、發展といふ思想の適用で說明するより外に、成功の方法はあり得ない。この際先決條件たるべきことは、骨格にも尙ほ認められる人間の身體上特徵が、數千年の經過に於て、漸次に且つ絕えず、或る一定の方向に『變化』し、かくて遂に動物性が明らかに退化して、將に人間的な固有性が之に代つて現はれるといふことである。これと同じ樣に、先史時代の道具や器具を比較する際、吾々はいづれの早い文化階段の收穫も、人間目的により良く適應せんがために、後になつて出來るだけ適當に完成せられたといふ推論に反對することは出來ない。それ故に、一般に吾々の今日の文化理想に從つて、より高く評價さるべき典型も、全く徐ろに、いはゞ自然史的に、一個のより低い典型から發達したに相違ないとの判斷を固持してあやまりない。されば研究の主要なる興味が先づ第一に差し向けられるのは、發見物をそれが比較されうる等級の中に持つて來ることであつて、さすればそれは然る

べき或る一の發展階段に配列され得る。この際に早計な一般化論や奇拔な說が立てられることは免れ得ないが、意見を鬪はすうち、遂には次第々々に愼重な批評によつて、いはゞ殼屑が除去されて眞理の果實が現はれて來るべきである。これについては、頭蓋骨測定が、ウィルヒョウの影響をうけて廣い範圍にしかも嚴密な方法で行はれて以來解剖學上の方面から、いつもます〳〵研究場裡の正面へと乘り出して來た。彎脚規を以て地球上あらゆる部分の人間の頭蓋構造について確定された二個の原型、長頭蓋（狹頭）人と短頭蓋（廣頭）人とは、先史時代の人骨についても見出される。初め誤つて、今日の劣等人種の間には短頭蓋が優勢だと觀察され、これに反し、西歐卽ち高等なる階級には長頭蓋が多くあらはれたが故に、太古にては、次々につゞきゆく世代の智的進步に相應して、短頭蓋から長頭蓋への漸進的發達

があつたものと考へられた。併し測定物件が多く比較せらること多いほど、是等の二個の嚴密に限定された領域の頭蓋測定より得た指數は、平均して常に接近して來るといふことが示された。ある一つの南洋の島から獲られた五個の頭蓋の研究でその特徵的型が平均指數で明らかに表はされたがその後に、同じ地點の島人の頭蓋五十個が歐羅巴の人類學博物館に齎らされて、測定されると直ちに、如上の既得の結果は駄目になつた。これがために骨相學（頭蓋學）の尺度は先史時代の時代區分に適用されなくなつた。併し他に若干少數の發見物が殘つてゐて、人間の頭蓋骨として、むしろ猿に似た型があるので、これこそ人類の始めであると要求されてゐる。けれどもこれも亦た、デュッセルドルフ近傍のネアンデルタールにて發見された樣な、たつた一つの頭蓋骨が、人間としての常規を脫してゐるのは、恐らく病理學上畸形

のために、さうなり得るといふウィルヒョウの支持する故障申立が、久しく邪魔をなして來た。されど一九〇七年ハイデルベルグを遠からぬマウエル附近の砂の凹地、及び一九〇八年コレーズ縣のラ・シャペル＝オー＝サンの側なる洞窟中で、同じ型（ティプス）の頭蓋骨が數々發見されて以來、先史時代には一個の人種が存在してゐて、このものは前額部が低く退いて、肩部が突出し、後頭蓋の發達不完全なるがために、現今、尙ほ見られる人間の種族型（ラッセンティプス）よりも寧ろ高等猿類に甚しく近寄つてゐるといふことは、最早爭はれない。ジャヴァに於ける孤立せる發見物をば、猿と人間との中間に位する一個の過渡型の組み立てに使はふと、若干研究家が企てたが、これはあまり成功しなかつた。デュボア博士の直立せる類人猿（ピテクアントロプス・エレクッス）の種族は發見物を嚴密に吟味してみると、正當に維持されなくなつた。これに反し、粗野なる型を有する眞實の人間と同時に、今日の歐羅巴人を差異なき頭蓋骨を有するより、開化した人種が原始時代の洞窟に棲み、マンモス象や馴鹿と鬪つてゐたことは、今は疑を容れられなくなつた。これら二個の先史時代の人種を、原始人（ホモ・プリミゲニウス）と智的人（ホモ・サピエンス）として相互に差別をつけ、若しくば佛蘭西の研究家とともに、特殊な人間型の變化をそれぞれの發見場所に歸するといふことは、大した爲めにはならない。以上述べ來つたところから、只だ知り得るのは、吾々は人類原始生活に對しても、いろ〳〵の變遷と複雜した關係を豫定してかゝらねばならぬといふことだけである。

それよりか時代區分の目的のために利するところ多いのは、先史考古學が、太古の道具や武器や家具などの夥しい數々に對し確立し得る分類法である。これで先づ第一に出て來る結果は、一方では金屬が人間の目的のために用ひられない時代や

國々と、他方では有用金屬を熟知してゐる文化階段との間の、著しい技術上文化の段落である。この金屬使用で、文化が如何に進歩するかを批判するために、こゝに一大好都合があつた、それは、啻に拾七八世紀の新世界に於ける探險航海の際に數多の民衆が尙ほ實用金屬の全く使用されない文化狀態にあるのに出遇はしたことのみならず、吾々は現今尙ほ、例へばニュウ・ギヲア內地で如何にして石斧で樹木が伐られるかを觀察し得ることは是れである。さらに技術上の解釋によつて、石器完成の差等がつきぐしく系列を成して居ることが指證される、卽ち吾々の博物館で多く見られるやうに、あまり尖らぬ燧石片から、進んでは遂に良く型の整つて、滑らかに磨いて、柄を嵌め込むための穴の穿たれた石斧(ケルト族)に至るまでである。また人若し細心に數多の發見地を穿鑿して之に伴ふ諸々の徵候を相互に結びつけ、他の場所

に於ける類似のものを比較して見れば、英人研究家サー・ジョン・ラボックの金屬期以前の文化時代を舊石器及び新石器の二期に分つべしとの提議が全く正當なることが知られる。これらのうち、後期の發展階段にもたらされた全き人間生活狀態は前期のそれに比して、變つて居つたに違ひない。何となれば彼等は既に飼ひ馴らした家畜や、麵麭原料や纖維植物の絲で造つた織布を有してゐた。彼等は弓矢を遠方に達する武器となし、これにより猛獸にも危害を加へ得た。土器製造が始まつて彼等の家庭經營を容易にし、且つ裝飾する助けとなつた。これらの文化階段の人間は往々にして、湖水や海の淺い渚に於て、高い杭の上に、安全に護られた住宅を拵へ、聚落を建設した(杭上家屋(プファールバウテン))。死者の埋葬に心から犧牲と尊敬とを捧げ、その永眠の地に紀念碑を建てる、これらの遺跡は現今も尙ほ認められる。人間は數多の關係に於て、新石

器時代に特殊なる習慣に屬魂親んで仕舞つたから金屬の輸入後、日常生活のために既に完成された道具が專ら用ひられるに至つても尙ほ、敬虔の情からして、若しくば宗敎上目的のために、昔の器物使用の習慣を保持した。後世の墳墓の發見が、尙ほも、古めかしく、使用されなくなつた石器時代の器具を吾々に示すのは、これがためである。

太古史研究の結果に於て最も驚くべきことは、舊石器時代の甚しく長く繼續したことである。特に丁抹、白耳義、佛蘭西に於ける發見物に、人間の器具の堆積して成れる種々異つた地層のあひまに、吾々が幾千年と主張せねばならぬ程の氣候上の變化の存することの證據となり得るものがある隨つてかの太古時代の人間が生存競爭しなければならなかつた動物界は、頗る顯著なる變化に陷らざるを得なかつた。舊石器時代の古い世代の人間が、舊エレファス・アンチクス象、犀、河馬、虎、條紋ハイエナに對して自分の身を護り得た頃には、現今氣候溫和なるそれらの國々でも、これらの動物の生存を可能ならしめたほどの暑い濕潤な風土にあつた。それから氣候が變化して寒冷濕潤となり、それがために唯だマムモス、毛の生えた犀、穴熊、麋のみが生存し得た。しかし、後に乾燥した曠野の氣候が、全動物狀態を根底から一變して、馴鹿、麝香鹿、貘、北極兎、狐の如き新時期の特色を成す哺乳類となつたときにも、人間はこれら如上の條件に自身を順應せしめ、自己特有の性質を維持した。佛蘭西のシエルに於ける發見物から、次の如く推定し得ると信ぜられる、それは卽ち、發見遺物中に於てマムモスの出現するところに同時代の完全な型式の諸器具の存在が常例であること、及びこの時以後、技術上進步は次ぎ々々と甚だ速かに行はれ、吾々はこの進步の跡を、ル・ムースティエー、オーリニヤツク、ソリュトレー、及びラ・マ

ドレーヌの發見場所に於て、驚嘆の眼もて迎り得ること是である。既にオーリニャックの發見品の屬する時期に於て舊石器時代の人間は、切込み細工や彫刻術により美術的の小工藝品を造り上げた佛蘭西及び北部西班牙の十二個以上の洞穴中、特に西班牙のサンタンダ近傍なるアルタミラ及びドルドーニュに於けるブーヌ谷に於て、舊石器時代の人間の意匠家的才能が不滅に殘されてゐる。吾々は總體に於て百七十七の獸類、就中マムモス、野牛及び馴鹿についての描寫を有してゐる。しかし、また幾何學的模樣もないでもない。これらの太古の彫刻作製方法に隨つて五階段より成る系列順が確立せられた、といふのは、いはゞ舊石器時代美術史が、これらの階段を通過したといふのである。新石器後期の時代が、却つて、これらの數多のより古い作品と美的價値を爭ひ得べき、何らの描寫や彫刻を造り出さなかつた、といふ觀察は

當然である。實に、舊石器時代人間の眞に迫り且つ大膽に畫かれた烏獸描寫の類似を求めるためには、吾々は寧ろ降つてエジプトの歷史に入り、さらに希臘人の歷史まで突き進まなくてはならぬ。併しながら、これらの燦爛たる藝術的成果の發展には、器械や道具の製作に於ける進歩が伴つていつたのではなかつた。骨もしくば角製の魚扠が作られ、骨又は木製の針に孔をあけるために燧石製の特殊なる穿孔器がつくられ、燧石斧に相應な柄がつけられる。しかし器具の形は、不規則で、凹凸して居るが、尙ほ未だその時の人から不愉快とも思はれなかつた。

新石器時代の主要なる特色は、刄物として用ひらるべき石の研ぎ磨きに、取りわけに多大なる價値をおいた所にある。佛蘭西及びその近隣の國々の風土は、やがて今日の如くになつてきて、溫帶地方の安樂を人間に與へた　如何に人間がこの風

土を自分達に利用して、全く異つた生活條件を創り出したかは既に上に述べた。この物の移つりかはりが、吾々にかくの如く急激に現はれるといふこと、及び石器時代の收穫が、よしや眞に人間的であるにせよ、廢物同然に見えるといふことは、太古史（原始時代史）が今尙ほ吾々に問題として提供してゐる一個の大なる謎である。新石器時代の始めをも唯だ幾千年といふ大ざつぱな紀年で、確立するだけでも、今日の科學の手段を以てしては不可能である。併しながら新石器時代文化は、十八世紀の半ばまで地球上數多の場所に於て、全く純粹に保存せられた。當時の世界旅行家の記載するところによつて、ルツソー時代に、人類の居住する地の三分の一は、この人間文化の原始狀態を越えて出て居なかつたと推定せねはならぬと信せられる。

金屬が人間の目的のために利用される始まりを地表上數多の地方に於て溯ると如何なる思ひ出も保存され得ない時代に到達する。原始人が、既に發見せられた鑛脈が自分に與へ得る利益を認識するのは、偶然の發明による。太古に於て種々異つた民族が、相互から獨立に、金屬利用に大いなる進歩をしてゐたといふ結論を裏書するものは、グリーンランドのエスキモーが歐洲人に接する以前までに、彼等の間で手に入る非常に純粹な鑛石から、鐵製の銛を作ることを知つてゐたとの事實、及び北亞米利加の印度人が、亞米利加發見前に、粗銅を打ち伸ばして道具を造つたといふ事實である。人間の目的のために鐵を使用することは、價値の少ない銅鑛の使用よりも、より大いなる技術上困難を伴はない。何となれば、冶金學の指摘するところによれば、古代世界の鐵鑛脈は、大いなる熱度なくして、否、普通の竈の火に於てすら、鍛へ上げることが出來る材料を供給したからであ

る。阿弗利加に於ては、銅の使用を知る以前既に鐵を工藝上に使用することが盛んに行はれた。されど歐羅巴にあつては、尙ほ一千年の間、他の鑛物の冶金術は、既に多大の進歩を遂げてゐたとはいへ、鐵器の製作は全く知られて居なかつたといふ、發展期間を認定しなければならぬ。何となれば、この間に顯著なる發明の一つがあつて、その結果九〇パーセントの銅と一〇パーセントの錫とで青銅といふ新らしい金屬の合金を作ることである。たとへ同じ形式から、頗る數多の銅製器具及び器械を鑄ることが、もつと早くから出來たにしても、尙ほ純粹な金屬の柔軟なことは、實地使用に於て甚多大なる缺點であつた。これに錫が加へられたので、鑄造せられた對象に、石と相匹敵し得る硬度が與へられ、而して必要な場合には、稀有の黑曜石にあつてすらも到達し得られない鋭さと抵抗力とがこれに與へられた。それ故に青銅器の利益は頗る多大であつた。苟もそれが知られるところは、どこでも、かの製作が困難で、用益の能力が遙かに少ない所のすべての石器をば、極めて速かに排除した。この際、不利なことは、唯だ地中海沿岸の最初に發達した國々に於ては錫の比較的に稀有なことであつた。それ故に如何に錫鑛石が探求せられたか、及び、古代に於て、これがために風荒き海洋を越えて遙か遠い航海も躊躇されなかつたか、は吾々の知るところである。銅と錫とが直接に相隣りして、しかも多量に手に入るところは、古代世界に於て本來一地方のみであつた、それは卽ち南支那である。吾々は今や、オーストララシヤでは青銅が太古以來一般に用ひられたこと、及ひ青銅刀が貝殼と並んで貨幣の代用をしたことを知つてゐるから、青銅鑄造は支那人の發明であらうといふ推測が確立されてゐる。とにかくも、青銅の製作は五千年より以前既に古い文

化世界に於て、全體に行はれた技術であつた。吾々にエジプト出産と知られてゐる最古の青銅鑄造はメーヅムの棒であつて、このものは基督紀元前三千七百年頃の時代まで溯られる。メソポタミアよりしても、吾々はグデアの青銅像（基督紀元前二千五百年頃）と、及び、これよりいくらか年代の新らしいウルグルの青銅瓶を有してゐる。傳說は青銅鑄造をカルデア人の發明としてゐるから、銅と錫との正しい合金の秘密は既に太古時代に支那から亞細亞高原地方を越えて、西の方チグリス河まで擴つてゐたらしい、その可能性は爭はれない。併し發見物の吾々に證明するところでは、青銅鑄造の技術は、既に太古時代に種々の國々に於て工場風に營まれ、その一定の形式と裝飾とが、更らに廣大な販路の領域を越えて擴められてゐたそれ故に、吾々は、杭上家屋（ファール・バウテン）に於て發見された青銅器の出所を遙かに中部ドナウ河畔の一產出地に溯り求め得る。西歐羅巴の青銅器は、スカンヂナヴィア及び北方獨逸の發見物と、その樣式を異にしてゐる。伊太利、バルカン半島及びドナウ盆地には、同種の型を有する太古の青銅器が行はれ、之に反しエーグ海諸島小亞細亞はエジプトと青銅文化を共通にしてゐる。されど南露西亞から東方ウラル山脈、アルタイ山脈をこえて西部支那までに達する青銅器の型はその間に最大統一がある。吾々はこの地域の全體に於て、形式及び裝飾上に一個の發展さへも辿り得、時代の上で順序をなす諸の樣式を、各々對立せしめて區劃することが出來る。何となれば唯だ極めて徐々に鐵の利用が青銅使用を驅逐して行つたからである。青銅器製作に適用された鑄造法は、移して鐵に用ひられないそのわけは鐵にあつては融解點が、いふまでもなく非常に高いので鐵をこの點に達せしむることは不可能であつたからである。人は唯だ鐵鑛を槌で

敲ち鍛へ得る程度まで灼熱して各々の鐵片をそれ〴〵特殊の形につくつた。最古の鐵製武器はその形式に於て先進の型である青銅製の模範に倣つてゐるから少くとも歐羅巴に於て青銅文化が既に高度に達した時始めて、鐵が一般的に使用され出した。久しい間、鐵器製作は豐富なる鐵鑛脈の附近に局限されたまゝであつた。二個の著名でなる古代鐵工業の搖籃地は、ケルンテルに於けるドラウ河上流のヒュッテンベルグ附近と、スタイエルマルクに於けるムール河岸とであつた。この近傍にあつて、岩鹽鑛脈あるがため太古時代から常に人間の住んでゐるハルスタットの墳墓に於て、青銅器に混じて發見される無數の鐵の發見物は、如上の搖籃地にその源を發するものである。ノイエンブルグ湖北岸なるラ・テーヌの發見物に材料を供給した瑞西ユーラ山脈のる鑛は、恐らく更らに後の時代に於て採取され始めたものらしい。今やハルスタット及びラ・テーヌの豐富なる發見物を技術學上、前後の兩時期に分つことが出來るから、先史時代の歷史は、歐羅巴の古鐵器時代のために之を二個のハルスタット時期と、三個のラ・テーヌ時期と合はせて五個の時期に區別する。これらの時期は、相互に連繫し、略ぼ基督誕生前一八五〇年からアウグスツスの時代までに達する。その故にこの懸け離れた領域にあつては、その先史時代なるものは、ずつと降つて、舊世界の他の部分が久しく古代史の一部として歷史の充分な明るみの中にあつた幾多の世紀にまで入り込むでゐる。それでも尙ほ、若しこれらの發見地の墳墓に於てホメロスの詩篇中の叙述と正確に一致する武器を發見する場合には、吾々は、或る早い時期に於ては巡り歩く鍛冶によつて、その技術がこの方面に傳播されたと認定すべきである。

エジプト以外の阿弗利加に於ては、鐵器時代の

前に如何なる青銅時代も先立つてゐない。印度では、青銅合金の秘密は甚だよく知られてゐたが、併し數多の世紀の間、通商關係によつて遠方から錫を手に入れるの可能性がなかつた。何となればマライ群島に於ける豐富で手近な鑛山は、近代に至るまで發見されなかつたからである。それ故に銅に必要なる硬度を與へることは、他の合金法を以て試みられ、その結果、劣等で眞鍮に似た所謂印度青銅に到達した。また他の地方では實に錫が手に入り難い時代があつて、それ故に純銅が再び多く用ひられ、若しくば他の諸金屬との合金が試みられた。されば、いかなる場合と雖も、すべての文化圏に對して、兩石器時代の次には、銅の時代、次に青銅の時代、それから鐵の時代へといふ進歩の型式が、必然的に續き起るといふことは、認容せられない。それよりかむしろ人間が金屬を日常使用するやうになつてからは、全世界の一部分から他の部分へ物品や技能が傳播されることが最もよく事物を決定する一個の重大要因である、だから、地球上いづれのところにも、技術上習得の規則正しい發達、自然の階梯について、何等の規則も確立され得ないのである。（第十節完結）